

要旨

[目的]

本研究は、ICU に再入室を繰り返す慢性心不全患者の心不全に関する認識と退院後の療養行動に関する認識を明らかにすることを目的とした。

[方法]

本研究は、質的記述的研究を用いた。ICU に再入室を繰り返す慢性心不全患者を対象とし、インタビューガイドを用いて半構造化面接を実施した。内容を IC レコーダーに録音し、逐語録を作成した。逐語録全体を精読し、目的に関連する文節を抽出し、可能な限り研究参加者の言葉を用いてコード化を行った。コードの類似性と差異性をもって比較検討し、カテゴリ化を行った。本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

[結果]

研究参加者は 5 名(平均年齢 82.6 歳、ICU 再入室平均 2.8 回、ACCF/AHA ステージ分類 C~D、平均 LVEF45%)であった。ICU に再入室を繰り返す慢性心不全患者は、【息苦しさ、あばら骨の下の圧迫感、気持ち悪さ、動悸が心不全の症状だと考えている】、【心不全の症状は、いつ起こるかかわからず、治療後にはその症状がすぐにとれていると感じるが、治らない病気だと考えている】、【心不全の原因は、塩分や水分の摂り過ぎで体重が増えたことによって、心臓や肺に負担をかけたことだと考えている】という心不全に関する認識を抱き、その根底には、【現在の生活を楽しみながら、少しでも長く生きていたいと思う】、【自分の人生なので、人に頼らずありのままに生きていきたいと思う】、【病気のことは考えず、気持ちだけでも健康なつもりで生きていきたいと思う】という心不全を抱えながら生きていくことに対する思いを抱いていた。更に、これらを基盤とし、【心臓に負担がかからないように、可能な範囲で運動に取り組んできた】、【食事のバランスや量、カロリーに気をつけてきた】という過去の療養行動や、【塩分や水分を摂り過ぎないようにすることが難しいと感じている】、【心不全そのものに対してどうしたら良いかわからない】という過去の療養行動上の困難から影響を受けながら、【仕事を調整し、運動を継続しようと考えている】、【定期受診を受け、医師とのコミュニケーションを図り、症状出現時は病院に行こうと考えている】、【栄養バランスを整え、食べ過ぎを避け、果物の 1 日量は守っていききたいと考えている】などの退院後の療養行動の認識を抱いていることが明らかになった。

[結論]

ICU に再入室を繰り返す慢性心不全患者は、ステージが進行し、心不全を抱えながら生きていくことに対する思いを根底に症状や原因に関する認識を抱いていた。そして、それらを基盤に、困難を抱えながらも、疾患に対する医学的な取り組みや生活上の取り組みを退院後も継続して行おうと考えていた。医療者は、ICU 在室中から患者が今後の生き方に対する思いを吐露できるように関わり、より良い治療の選択ができるようにパートナーシップを形成する必要性が示唆された。